

『在宅ケアで出会う高齢者の性』

荒木乳根子・著

えん どう のぶ こ
遠 藤 信 子

介護保険制度がスタートし、今まで以上に必要性が高まった職種が高齢者を支える「直接援助者」すなわちホームヘルパー、ケアワーカーである。ゴールドプラン'21による目標数は現在の倍数の37万人としている。

これに伴い日本全国で急ピッチの養成が行われている。量の確保もさることながら、同時に質的な諸能力の確保が望まれることは論を待たない。現在行われているカリキュラムを、さらに専門性の高い身体介護能力の獲得や高い倫理性、豊かな人間性を充実させることが重要となる。対人援助サービスのなかで、特に共感性や基本視点、さらに職業倫理はその核となるものといえる。

ヘルパー養成のテキストはほぼ毎年同じ。このブックシリーズ⑪のタイトルを見て、お！と思った。そして大いに興味と期待を持った。なぜなら、ヘルパー研修に組み込まれている「共感的理解と基本的態度の形成」の担当講義（講習）時に必ず問題提起されるテーマの一つであるからであり、その度に受講者と共に考え、悩み、話し合っ、その事例や状況の判断に関する基本的態度を学習しているという現状であった。参考文献として活用できるのではないかという期待をもちつつ……。

この本はとても読みやすい、わかりやすいものである。著者が調査し、分析した表や事例が多く挿入されている。「高齢者の性の実際を知る」の項では、年齢による変化が、具体的な数値（グラフや図形）で示され、納得しやすい。その実態を踏まえた上で、高齢者にとっての性の持つ意味を事例を通して“何故このような言動をするのか”を、心の問題としていかに受け止めるか。さらに、このような高齢者の要求表出とその対応についての施設と在宅における相違にも言及している。そして何よりも心強い——対応法——（心理

的アプローチ)が詳述され、説明されている。

高齢者の方々が、誰一人として同じ人生を歩んでこられていないことは一般的に理解されている。介護の場面においてもその一つ一つの具体的ケア、例えば食事の介助法にしても、入浴法にしてもその人自身の生き方がさまざまな要素を含んで一つの要素となる。

これまで多くの先人がその対応法を研究し、テキストにもなっている。しかし性の問題に関してはいままで参考にする書籍はそう多くはなかった。看護職として現場にいた時代にもこの問題はやはりケア上の重要な要素の一つであった。看護職である大工原秀子さんが書かれたものが、非常に画期的であり、かつ特異な存在として評されたことが、随分昔のことのように思い出された。

確かに世の中の変わるものと変わらざるものを思う。多くのホームヘルパーやケアワーカーが良き導きを得られる、心優しくなれる一冊である。

(本学人間福祉学科助教授)

『在宅ケアで出会う高齢者の性』中央法規 1997年

著者：荒木乳根子(調布学園短期大学教授)

A5判167頁、1,400円